

美学的観点からみる AI 音楽

東京大学人文社会系研究科美学芸術学専攻 曹 有敬

私の研究人生は 2008 年に来日し、日本で「美学（Aesthetics）」という学問と出会ったことから始まる。「美学」はアメリカでは哲学の分科に過ぎないが、日本では一つの独立した学問として 100 年以上の歴史を誇っている。「美学」という学問を一言で定義するのは容易ではないが、端的に言うと、人間はどのようにして「美しいもの」を感覚（知覚）するのか、そしてそのときに働く感性はどういうものなのかを考える学問である。それゆえ、人間が営むあらゆるものが対象となりうる。そして、その範囲は無限に広がる。その一つの例として AI 音楽を美学的観点から見よう。

AI 音楽とは既存の音楽を大量に人工知能システムに入力し、人工知能がそのデータの分析をもとに作り出す類似様式の音楽を指す。例えば、作曲家デイヴィッド・コープ（David Cope）による AI 作曲家エミリー・ハウエル（Emily Howell）はベートーヴェンやマーラーなど、昔の作曲家の様式に基づいて数多くの作品を短時間に作ることができる。また、大衆音楽の分野においても、韓国光州科学技術院のアン・チャンウク研究チームが開発した AI 作曲家 EvoM がアルゴリズムを通して K-pop を含む様々な大衆音楽を作ってきた。この AI によるほとんどの作品に対して、学問、非学問の領域を問わず、世間は AI の歴史、科学的潜在力、そして商業的価値などといった AI 自体の科学技術的側面や実用的価値に主な関心を寄せてきた。しかし、近年では環境哲学者による社会・倫理的問題や美学・哲学の領域におけるポストヒューマニズムの枠組みまで議論は拡張している。

AI 音楽と人間との関係から、「美学」の主要概念の一つである「創造性」を再考することができる。西洋芸術音楽すなわちクラシック音楽における AI 音楽への評価では、AI による曲は偉大なクラシック作曲家の曲を単純に模倣した趣味の悪い曲だと批判されている。実際 AI が作った曲を聞いてみると、確かに人間作曲家が作った曲に比べ、作品の質ははるかに劣っているかもしれない。しかし、こういった批判は実は 18 世紀後半以降問題にされてきた人間作曲家における独創性の問題にも繋がっている。18 世紀後半に「天才」や「独創性」という概念が台頭したことにより、中世から綿々と行われてきた既存の音楽を用いて作曲

する行為が、批判的となったのである。つまり、借用行為自体がオリジナリティーのないものとされたのである。例えば、後期ロマン派作曲家のグスタフ・マーラーの引用技法は彼の生前における「ユダヤ性」——否定的意味として——と結び付けられ、オリジナリティーが疑われたのである。このような傾向は 50 年代、60 年代のモダニズムまで続いていた。常に新しさを求めたこの時期の進歩主義作曲家及び批評家にとっては、調性音楽の使用は「過去への回帰」を象徴するものであるため既存の音楽を引用する作法はある種の「汚れた音楽」だったのである。

AI 音楽における「創造性」への熟考はこの問題を再び考えさせるきっかけになるだろう。AI 音楽にまつわる①創造性とは何か、②作曲家の役割は何か、③作品とは何か、④この AI 音楽に対して聞き手はどう受け止めるのかといった様々な美学的問いに対して、次のように答えられるだろう。AI に情報を入力する際にその情報を選択するのは人間作曲家である一方で、そこから実際一つの新たな曲を作り出すのは AI である。上述のコープが示しているように、たとえ人間作曲家が情報を収集・選択し入力するとしても、AI は予想外の結果物を作り上げることができる。この原理から AI は「創造性」を有することができる。コープによれば、「創造性」は人間の靈感のみに依存するものではなく、機械という他の要因によっても発生するのである。そして「創造性」はそれを巡る文脈において成立し、また、無から生まれるものではなく、他者の作品の合成から生まれるものである。さらに重要なのは、「創造性」の有無は美的なものを受容するか、拒否するかを判断する他者の判断に依拠するということである。こういったコープの主張は「創造性」を、完成した作品という結果物ではなく、創造のプロセスから見出すものである。この AI の「創造性」に関連する議論は、人間の「創造性」をより深く理解するための重要な端緒を提供している。またこのことは、無から新しいものを創造するという近代的神話に縛られたわれわれの鑑賞態度を見直すために、大きな示唆を提供するものである。